令和７年度第１回農業大学校外部評価委員会
議事録（要旨）

日時　令和７年７月９日（水）14:00～15:15
場所　大分県立農業大学校　会議室
出席者
　外部評価委員
　　大分県高等学校教育研究会農業部会長　佐藤　智之
　　大分県指導農業士会長　仲井　貞一
　　大分県農業法人協会長　上原　隆生
　　大分県指導農業士会副会長　植木　美和
　　農業大学校同窓会副会長　湯浅　正徳
　　大分県農業協同組合営農担当・常務　宇都宮　隆一
　（欠席委員）
　　豊後大野市農業振興課長　赤嶺　繁素
　　中部振興局農林漁村振興部長　生野　栄城

　農業大学校
　　藤田校長、太田副校長、木村次長、兒玉部長、手嶋部長、安達教授

議事内容
・審議事項「令和７年度運営方針の数値目標と主な対策について」全会一致で承認された。
・委員からあった意見等は以下のとおり（〇は質問、意見、→はその解答）

議事（１）　審議事項
　令和７年度運営方針の数値目標と主な対策について

◎運営方針１　活気あふれる学園づくり
（学生募集について）
〇県外の生徒に対して募集活動をしているのか。東京などで行っている就農募集に参加しているのか。
→東京、大阪、福岡で、研修部を中心にブースをもらって募集活動をしている。
〇基本になる魅力を一つ作ると、県外からも学生を呼べるのではないか。ドローンでも良いが他県の農大にはないことに取り組んで、魅力ある学校にすれば、生徒が集まってくるのではないか。
　大分は水耕栽培の生産があるが、そちらに目が向いていないので、そこをやるのも一つの方法ではないか。
→農大の魅力づくりとして、生産現場の課題を学生のプロジェクト学習で取り組み、現場にフィードバックする。奇をてらうというよりも、現地と連携して水耕栽培やスマート農業などの先進技術等を活用して、課題解決に取り組むことが大事と考えている。
〇ドローンは農大で資格が取れるのか。
→免許の取得はできないが、操縦の訓練はできる。
〇県北の白ネギ栽培では、一昨年くらいから月２、３回程度ドローンによる防除をしている。自分でするより早いので業者に頼んでいる。せっかくドローンがあるのならスマート農業の方向でアピールしてもよいのでは。
〇県外にアピールすることには賛成だ。県外の中学を卒業して大分県立久住高原農業高校に来る

生徒もいる。神奈川から来た生徒に話を聞くと、畜産をしたかった、寮があった、という理由で大分に来たということだった。何が引っかかるか分からないので、広く声かけをしたほうが良いと思う。
〇久住高原農業高校では、この 7 年間で 41 名の県外の生徒が来てくれた。生徒が何を見て進路先を決めているかというと、ホームページで学校の特徴を見ている。久住高原農業高校から今年２名が他県の農業大学校に進学した。１人は米作りの研究がしたいから新潟の農大に行った。もう１人は和牛を育てたいから鹿児島の農大に行った。生徒は目的を持って進学先を決めている。その農大に何か魅力があるから、そこに行くということだ。大分県農業では特徴は出しにくいかもしれないが、何か見つけて取り組むと面白いと思う。

◎運営方針２　質の高い教育の提供
（農家研修について）
〇農家研修にはどの位行くのか。
→農家研修は１年の時に３週間、その他２年の時にインターンシップに行く。
〇全員が一緒の時期に研修を実施することは変えられないか。
→カリキュラムがあって、講義が入っており、研修期間をずらすことは難しい。
→来年度の創立 60 周年を機に、あり方の検討をしているところ。その参考として、先日、群馬の農大に行ってきた。群馬では農家研修は 26 日間で、毎週金曜日に行っている。熊本農大では毎週水曜日は１日実習とし、各自で研修計画を組み立て、インターンシップでも良いし、資格取得でも公務員試験対策でも良いとしている。大分農大は 10 月に一斉に行っているが、学生が課題を整理し、自ら計画して進路先を目指した研修を行えるようにしたい。
〇先日の農大学生と法人協会の意見交換会で１年の学生からアルバイトをしたいとの申し出があった。１年の時から法人協会と組んで、土日にアルバイトをしてもらうのもありではないか。コミュニケーションが取れるし、就職にもつながる。今度、法人協会でも役員会にかけて話をしてみたい。
〇泊まりの研修はあまりないのか。
→以前は農家の生活を含めた体験も研修目的であったが、今は生活と職業が離れており、状況が変わってきている。
〇農家研修の受け入れは、いつまでに手を挙げれば良いのか。
→今、振興局で取りまとめしている。
〇どこに研修に行くのが多いのか。
→実家から通える所、多いのは学生寮から通える所。
〇以前、私も農大で担任をしていたが、農家研修では他人の家で暮らせない学生がいた。久住高原農業高校でもインターンシップやアルバイトは農家とつながる良い機会と捉えているが、そこにどうやって行くかが問題。タクシー代、バス代を市で支援してもらえないか相談している。久住高原農業高校はアルバイトを許可しており、周辺の農家のところに行っている。
〇本年度から数値目標をプロジェクトで全国を目指すとしているが、そのためには複数年のテーマを決めて、チームとして中長期的に学校としてサポートしていく事が必要だと思う。久住高原農業高校は、昨年全国３位を受賞したが、集中してやってきた。８月６日から８日にかけて九州学校農業クラブ連盟発表大会がホルトホールで開催される。九州はレベルが高いし、学生や先生が見に来ると参考になると思う。大分東高校が事務局をしているので話をしてみてはどうか。
〇豊後大野市の農業青年の会であるＺＡＣのプロジェクト発表の練習を見に行ってきた。刺激を受けると思うので連携してはどうか。
〇他の人の発表を見ると、どういうことをしてよいか分かる。久住高原農業高校では発声練習のためアナウンサーを呼んで勉強している。

→プロジェクトの取組については、１年生の課題設定が最も重要で、指導職員に対して生産現場や試験研究と連携して、課題解決に向けた学生の目的意識を高めるようお願いしているところである。

〇運営方針３　新規就農者の確保

〇就農率 80%以上は高い目標だが、過去は９割近い時期もあった。今は多様な就職先があり、農業法人を選ぶことが可能である。法人が職場になることを知ってもらう取組みが必要と思う。
〇就農した 30 代位の農大卒業生と学生とのマッチングはしているのか。
→農業青年連絡協議会から OB 氏などに特別講座で話をしてもらっている。
〇就農者を増やすには、農業法人に入って５年くらい勉強して独立していくのがよいのではないか。今の農業への新規就農は資材の高騰などで難しい。親元就農ならよいが、現状で新規就業は厳しいと思う。また、自分も２、３年前までは売っていくことを主に考えていたが、今は異常気象の状況もあり、しっかり作ることが大切と考えている。技術を磨くには１、２年では無理で、自分の息子を見ると 10 年はかかる。雇用就農してそれから独立して就農するのがよいのではないか。10 年すると時代も農業も変わり、就農するには良い方向になっているかもしれない。
〇今の保護者は非農家が多く農業の現場を知らない。バスツアーを平日に実施しても人が集まらないので、土日にすると人が集まると思うが、農業法人の方で対応できないか。
→対応したい。農業法人に目を向けてもらうことが重要である。
〇就職先に農業法人を選んでもらうため、２月に農業高校と農業大学校を対象とした就農相談会を新規就業･経営体支援課が企画している。高校生への求人票を出す農業法人も多くなっている。
〇参加の申し込みはいつから。
→申込はこれから。
〇農業法人を就職先に選んでもらうには、いかに休みを作るかが一番の課題と考えている。１月から４月までは週休２日だが、夏にかけてなかなか休みが取れなくなる。魅力ある就職先になるように法人も改革していかないといけない。休みが２日ないと来てくれない。給与やボーナスについても選んできてもらえるようにしっかり整えないといけない。休みを取るためには人を入れないといけないので、人件費がかかるので我々としてはバイヤーに農産物の仕入れ価格を上げてくれと言っている。
→今、学生の価値観は変わっており、休みがないと就職先に選ばない。就職先となる農業法人のレベルアップも重要と考える。雇用就農から独立就農やのれん分けなど、農業法人と一緒に農業の担い手を育成していくことが必要である。
〇自分のところでは役員にならないかと言っている。
→農業法人の経営の中心になっていくのもありだと思う。昨年、後援会の視察に行った愛彩ファームでは、現場責任者である 30 代の農大ＯＢが説明をしてくれた。しっかりとした対応に保護者は感心し、農大ＯＢに農大はどうだったかと尋ねたら、もう一度農大で学び直したいと言ってくれた。
→自分の息子も、１回やると課題が出てくるので、勉強したいと言っていた。
〇若い人は新しいことを知りたがっている。久住高原農業高校もアグリ創生塾を併設し、トップレベルの学術表彰者やバイヤーなどを招き、生徒に話をしてもらっている。農大としても農業経営や技術にとても秀でた方を招き研修を行ってもよいのではないか。
→昨今、リカレント教育や学び直しが重要と言われているが、農大のあり方を検討する中で、学び直しの提供や経営塾でのトップリーダーの集会やセミナーの開催、学生や研修生との交流など、農大が大分県の担い手の拠点になり、多くの人が農大に目を向けてもらえるよう農大の価値を上げる取組が必要と考えている。

以上